

大学生におけるVolunteer Function Inventoryの交差妥当性の検討

坂野 純子* 矢嶋 裕樹 中嶋 和夫

要旨 本研究は、本邦の大学生におけるVolunteer Functions Inventory (VFI)の交差妥当性ならびに有用性を検討することを目的とした。統計解析には、東京都内のA, B大学ならびに中・四国地方のC, D大学の学生1,544名のうち、調査項目に欠損値がない1,429名のデータを用いた。まず、確証的因子分析により、米国において提起されたVFIに関する4つの因子構造モデルの本データへの適合度を評価した。その結果、「感情的安寧 (protective)」「利他主義 (values)」「職業上での成功 (career)」「社会的つながり (social)」「知識の習得 (understanding)」「自尊心の高揚 (enhancement)」から構成される6因子2次因子モデルがおおむねデータに適合することが示され、VFIの交差妥当性が確認できた。また、ボランティア活動に参加している者は、そうでない者と比して、VFIの総合得点ならびに領域別得点が有意に高い傾向がみられた。この結果は、大学生のボランティア活動への参加促進を図るうえで、VFIが有用な資料となりうることを示唆するものである。

キーワード：ボランティア、動機、Volunteer Function Inventory (VFI)、構造方程式モデリング

I 緒言

ボランティア元年(1995年)以降、わが国において、ボランティア活動への参加者は大幅な増加傾向をみせている¹⁾。一般に、ボランティア活動は「非営利(無償性)でかつ自発的になされた(自発性)、他者への関わり(連帯性)を増強する一連の活動²⁾と定義され、その社会的貢献度は計り知れないものである。このようなボランティア活動への関心の高まりとともに、近年、ボランティア活動そのものはいうまでもなく、ボランティア活動による活動者個人の変容が注目されるに至っている³⁾。ボランティア活動によってもたらされる活動者個人の変容を把握することは、ボランティア活動に積極的な意味を与え、ボランティア参加への促進を図る上で有用な資料となることが期待される。

これまでボランティア活動に関する研究において、活動者個人の変容を把握すべく多様な概念が提起され、これら概念の測定尺度が開発されてきた⁴⁻⁶⁾。このうち代表的な概念として、ボランティア活動への参加動機(Motivation to Volunteer)がある⁷⁾。Cralyら(1992)は、ボランティアへの参加動機

に関する既存の研究を概観し、ボランティア活動への参加動機を欲求充足の観点から要約することを試みている⁷⁾。この結果、ボランティアへの参加動機として、「感情的安寧(protective)」「利他主義(values)」「職業上での成功(career)」「社会的つながり(social)」「知識の習得(understanding)」「自尊心の高揚(enhancement)」の6つの領域を想定し、これらを下位領域とするVolunteer Functions Inventory(以下、VFI)を開発している。VFIの信頼性ならびに妥当性に関しては、すでに米国のボランティア活動参加者を対象として確認されている⁷⁻⁹⁾。ただし、本邦におけるVFIの妥当性、すなわち交差妥当性ならびに有用性は未だ検討されていない。

本調査研究は、大学生を対象として、本邦におけるVFIの交差妥当性ならびに有用性を検討することを目的とした。なお、大学生を対象とした理由は、第1に、大学生のボランティア活動への参加率は主婦や定年退職者と比して低く、一般に時間的な余裕があり、何らかの専門的知識・技術を有する大学生のボランティア活動への参加が大いに期待されてい

*岡山県立大学保健福祉学部

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

ること、第2に、進路の決定段階期にある大学生が、ボランティア活動を通じて経験する多くの事柄は、自身の将来に程度の差こそあれ重要な意味を帯びてくるものと考えられたことによる。

Ⅱ 方法

1. 対象およびデータの収集

調査対象は、東京都のA、B大学及び中・四国のC、D大学に在籍する大学生2,500名を対象とした。各大学の概略は、東京都内のA大学ならびにB大学は中堅私立文系総合大学である。一方、中・四国のC大学は高等学校、短期大学が併設されている文系私立女子大学であり、D大学は共学の中堅理・文系私立大学となっている。調査は調査協力の得られた4校の大学に調査票を送付し、講義時間を利用した集合調査法により実施した。なお調査期間は、平成13年5月中旬から同年7月中旬までの約2ヵ月であった。

調査内容は、基本的属性（性、年齢、所属大学）、ボランティア活動への参加動機、現在のボランティア活動の参加状況とした。このうち、ボランティア活動への参加動機は、VFIで測定した。なお、VFIの邦訳はいくつか提起されている^{2,3)}ものの、未だ確立しているとは言いがたいことから、本調査研究ではこれら既存のものを参考に再度VFIの邦訳を試みた。その際、日本語として不適切な表現については、原意を損なわないよう留意し訂正を加えた。この結果、得られた最終的な項目は表1に示すとおりである。VFIは前記6つの領域「感情的安寧」「利他主義」「職業上の成功」「知識の習得」「自尊心の高揚」に関して、それぞれ5項目を配置した計30項目で構成されている。各項目に対する回答は「はい：2点」「どちらでもない：1点」「いいえ：0点」の3件法で求め、得点が高いほど、ボランティア活動参加への動機が高いことを意味している。

ボランティア活動の参加状況については、「2点：定期的に参加している」「1点：不定期的に参加している」「0点：ない」の3件法で回答を求めた。この調査項目は、VFIの構成概念妥当性を検討することをねらいに、外的基準として用意されたものである。

なお、統計解析には、1,544名分の回収票（回収率61.8%）のうち、基本属性（性、年齢、所属大学）、VFI、ボランティア活動の参加状況の各項目に欠損

値がない1,429名のデータを用いた。

2. 分析方法

統計解析にあたっては、まずVFIの交差妥当性を評価するため、その因子構造モデルを確証的因子分析で検討した。このときVFIの交差妥当性が日本においてなされていないことを勘案し、先行研究においてすでに提唱されているCnaanらの1因子モデル¹⁰⁾、Lattingらの2因子モデル¹¹⁾、Cralyらの6因子斜交モデル⁸⁾、Okunらの6因子2次因子モデル⁹⁾の4つの測定モデルを取り上げ、そのデータへの適合度を吟味した。

Cnaanらの提起する1因子モデルは、ボランティア参加者と非ボランティア参加者を対象とした研究において、バリマックス回転による探索的因子分析の結果から導かれたものである¹⁰⁾。これはVFIの各項目が1次元に縮約されること、すなわちVFIが単次元尺度であることを仮定している。

Lattingらの提起するVFIの2因子モデルは、ボランティア参加者を対象とした研究において提起され、VFIが「利他的動機」因子と「利己的動機」因子の2つの構成概念を測定しうることを示すものである¹¹⁾。

VFIの開発者であるCralyらが提起する6因子斜交モデルは、VFIが「感情的安寧」「利他主義」「職業上の成功」「知識の習得」「自尊心の高揚」の6つの構成概念を測定しうることを認めながらも、それらが1次元に縮約できることを仮定していない。この点に関して、Cralyらの6因子交モデルに1次元性を仮定したものがOkunらの提起する6因子2次因子モデルである。Okunらは、前記3つの因子構造モデルとみずから想定した6因子2次因子モデルの適合度の比較検討を確証的因子分析により行なっている¹²⁾。この結果、6因斜交モデルと2次因子モデルの適合度のみが統計学的な許容水準にあったことを報告している。

上記分析モデルの全体評価には、 χ^2 値に加え、説明力の程度として適合度指標「GFI（Goodness of Fit Index）」、修正適合度指標「AGFI（Adjusted GFI）」、「RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）」、赤池式情報量基準「AIC（Akaike's Information Criteria）」を採用した。このとき、 χ^2 値は標本数の影響を受けやすい¹³⁾ことから、本研究では参考指標とした。

GFI及びAGFIは一般的に0.9以上、RMSEAは0.08以下であれば、その因子構造モデルがデータに十分適合していると判断される^{12, 13)}。また、AICは複数個のモデル比較において用いられ、この値が小さいモデルほど適合の良いモデルと判断される¹²⁾。モデルの部分評価であるパス係数の有意性は、棄却比「Critical Ratio (以下、「C.R値」と略)」を参考にし、その絶対値が1.96以上(5%有意水準)を示したものを統計学的に有意と判断した^{13, 14)}。

次いで、VFIの有用性を評価するため、VFIの各因子と「ボランティア活動への参加状況」との関連性を一元配置分散分析ならびに多重比較により検討した。

なお、統計解析に用いたソフトウェアについて、確証的因子分析には「AMOS Version 4」¹⁴⁾を、その他の解析には統計ソフト「SPSS 10.0J for Windows」を使用した。

Ⅲ 結果

1. 対象者の基本的属性

性別構成割合は、男性512名(35.8%)、女性917名(64.2%)となっていた。分析対象者の平均年齢は19.2歳(標準偏差1.20、範囲18-24歳)であった。所属大学に関しては、東京都A大学が570名(39.9%)、B大学が251名(17.6%)となっており、中・四国のC大学は234名(16.4%)、D大学が374名(26.2%)であった。なお、「ボランティア活動の参加状況」の回答分布に関しては、「不定期に参加している」が最も多く734名(51.4%)、次いで「ない」が584名(40.9%)となっていた。最も少なかったのは「定期的に参加している」と回答した者で111名(7.8%)であった。

2. VFIの回答分布

VFIについての回答分布は表1に示すとおりである。回答「はい」に着目するなら、「X14: ボランティア活動によって、ものごとについての新たな考え方が得られる」が1,339名(93.7%)と最も多く、次いで「X18: ボランティア活動からは、直接的な体験を通して、さまざまなことが学べる」が1336名(93.5)、「X25: ボランティア活動によって、自分がいろいろな人と付き合っていく方法が学べる」が1157名(81.0%)となっており、いずれも「知識の習得」領域に関する項目であった。反対に、

「はい」と回答した者が最も少なかった項目は「X24: ボランティア活動は、煩わしいことから逃避するのに、よい方法だ」で66名(4.6%)、次いで「X11: ボランティア活動を行なうことで、他の人よりも恵まれていることへの罪悪感がいくぶん和らぐ」が124名(8.7%)であり、これらは「感情的安寧」領域に関する項目であった。

3. VFIの因子構造モデル

分析対象者1,429名のデータに対する前記4つの因子モデル(1因子モデル、2因子モデル、6因子斜交モデル、6因子2次因子モデル)の適合度を確証的因子分析により検討した(図1、表2)。まず、GFIならびにAGFIに着目すると、1因子モデルと2因子2次因子モデルは許容水準を大きく下回る値を示していた。同様に、6因子斜交モデルと6因子2次因子モデルのGFI及びAGFIも決して高い値とは言えないものの、モデルを積極的に棄却するほど低いものではない。一方で、RMSEAはいずれのモデルにおいても良好な値を示していた。なお、AICに着目すると、最も低い値を示していたモデルは6因子斜交モデルであり、他のモデルと比して、このモデルが本データを最も良く説明していることが示唆された。

しかしながら、尺度を構成するうえで、それぞれの領域が1次元に縮約できることが望ましいこと、また6因子斜交モデルと6因子2次因子モデルの適合度にほとんど差がみられないことを勘案し、本研究では6因子2次因子モデルを最終モデルとして採用した。

4. ボランティア活動の参加状況別にみたVFIの総合得点と下位尺度得点

まず、ボランティア活動への参加状況を「定期的に参加している」群、「不定期に参加している」群、「参加経験なし」の3つの群に分割し、VFI得点の差の検定を一元配置分散分析により検討した(表3)。その結果、VFIの総合得点ならびにすべての下位尺度得点において有意差が認められた。次いで、多重比較を行ったところ、「定期的に参加している」群と「参加経験なし」群、「不定期に参加している」群と「参加経験なし」群にそれぞれ有意な差が認められ、ボランティアに参加した経験のある者ほどVFIの総合得点ならびに下位尺度得点が高い傾向に

表1. Volunteer Function Inventory (VFI)の各項目と回答分布 (n=1429)

項目	回答カテゴリー					
	はい		どちらともいえない		いいえ	
感情的安寧 (protective)						
X7 私がどんなに嫌な気分ときでも、ボランティア活動はそれを忘れさせてくれる	168	(11.7)	647	(45.3)	614	(43.0)
X9 ボランティア活動をすることで、あまりさみしさを感ぜないです	174	(12.2)	658	(46.0)	597	(41.8)
X11 ボランティア活動を行なうことで、他の人よりも恵まれていることへの罪悪感がいくぶん和らぐ	124	(8.7)	510	(35.7)	795	(55.6)
X20 ボランティア活動は、自分が直面している個人的な問題を解決するのに役立つ	241	(16.9)	670	(46.9)	518	(36.2)
X24 ボランティア活動は、煩わしいことから逃避するのに、よい方法だ	66	(4.6)	336	(23.5)	1027	(71.9)
利他主義 (values)						
X3 私は、自分よりも恵まれていない人々のことが気になる	426	(29.8)	677	(47.4)	326	(22.8)
X8 私は、自分が直接ボランティアで関わっている人たちのことが、とても気になる	431	(30.1)	670	(46.9)	328	(23.0)
X16 自分は、困っている人々をみると気の毒に思う	865	(60.5)	426	(29.8)	138	(9.7)
X19 自分は、他の人を助けることを大切に思っている	1150	(80.5)	234	(16.4)	45	(3.1)
X22 自分は、自分のためになることならやれる	753	(52.7)	545	(38.1)	131	(9.2)
職業上の成功 (career)						
X1 ボランティア活動は、私がなりたい職業に挑戦するきっかけをつくってくれる	687	(48.0)	481	(33.7)	261	(18.3)
X10 ボランティア活動は、仕事や職業に役立つと思われる新たな出会いの場となる	1154	(80.7)	231	(16.2)	44	(3.1)
X15 ボランティア活動は、また別の職業を探す機会を与えてくれる	736	(51.5)	525	(36.7)	168	(11.8)
X21 ボランティア活動は、自分が選んだ職業で成功することに役立つ	655	(45.8)	577	(40.4)	197	(13.8)
X28 ボランティア活動の経験は、履歴書を書くときにいい印象を与える	627	(43.9)	643	(45.0)	159	(11.1)
社会的つながり (social)						
X2 自分の友達は、ボランティア活動に参加している	653	(45.7)	124	(8.7)	652	(45.6)
X4 友人は、私がボランティア活動に参加することを望んでいる	230	(16.1)	641	(44.9)	558	(39.0)
X6 私の知っている人々は、地域での助け合いに関心が高い	380	(26.6)	630	(44.1)	419	(29.3)
X17 親しい人の中に、地域での助け合いをととても大切にしている人がいる	629	(44.0)	369	(25.8)	431	(30.2)
X23 ボランティア活動は、自分がよく知っている人にとって重要な活動になっている	500	(34.9)	651	(45.6)	278	(19.5)
知識の習得 (understanding)						
X12 ボランティア活動を行なうことで、自分が取り組んでいることをさらに深めることができる	1053	(73.7)	310	(21.7)	66	(4.6)
X14 ボランティア活動によって、ものごとについての新たな考え方が得られる	1339	(93.7)	76	(5.3)	14	(1.0)
X18 ボランティア活動からは、直接的な体験を通して、さまざまなことが学べる	1336	(93.5)	81	(5.7)	12	(0.8)
X25 ボランティア活動によって、自分がいるいろいろな人と付き合っていく方法が学べる	1157	(81.0)	209	(14.6)	63	(4.4)
X30 ボランティア活動によって、自分の長所を見出すことができる	724	(50.7)	575	(40.2)	130	(9.1)
自尊心の高揚 (enhancement)						
X5 ボランティア活動は、自分の大切さを気づかせてくれる	836	(58.5)	494	(34.6)	99	(6.9)
X13 ボランティア活動は、自尊心を高めてくれる	533	(37.3)	591	(41.4)	305	(21.3)
X26 ボランティア活動は、自分が必要とされていることを実感させてくれる	743	(52.0)	509	(35.6)	177	(12.4)
X27 ボランティア活動は、自分が好ましい人間であることを感じさせてくれる	303	(21.2)	756	(52.9)	370	(25.9)
X29 ボランティア活動は、新しい友達をつくる手段になる	974	(68.2)	359	(25.1)	96	(6.7)

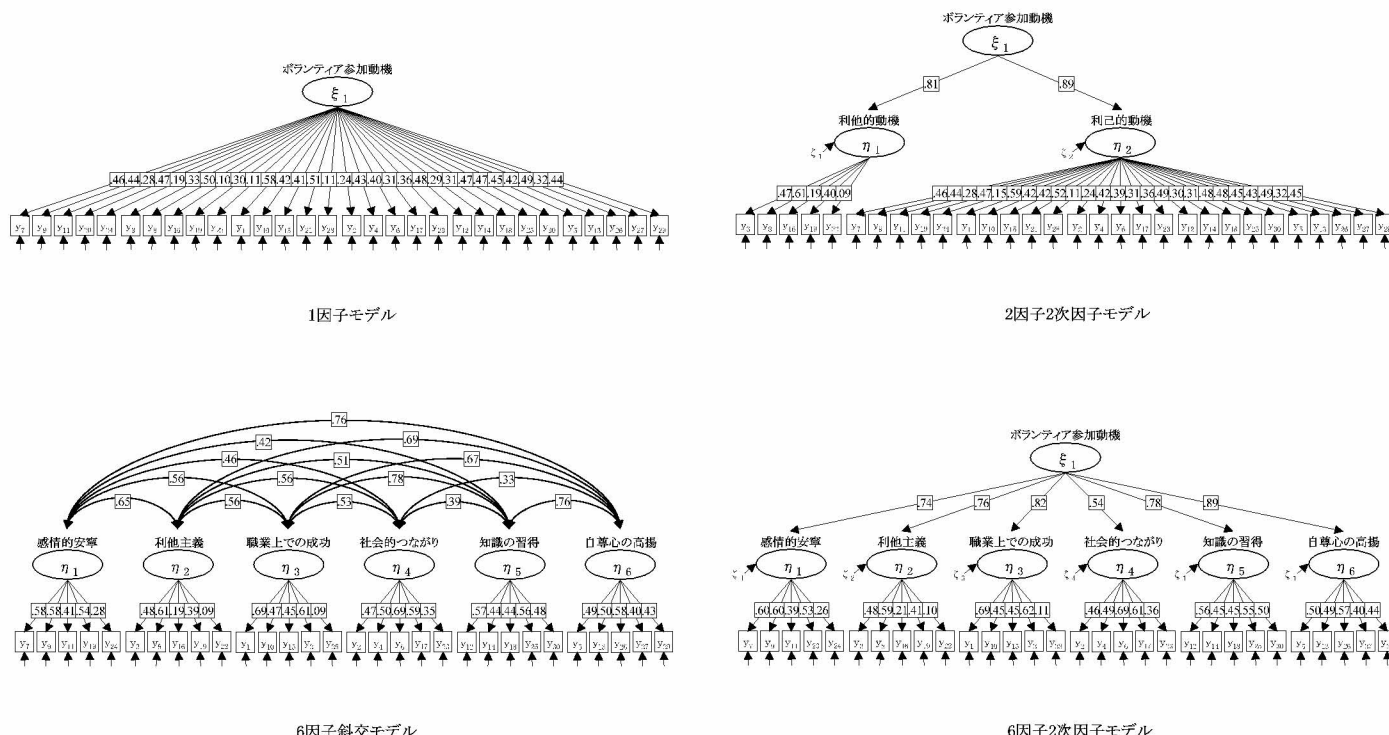


図1.VFIの因子構造モデル

表2. VFIの各種因子構造モデルの適合度

	χ^2	df	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
1因子モデル	3946.875	407	0.812	0.786	0.078	4062.875
2因子2次因子モデル	3243.656	404	0.833	0.807	0.070	3365.656
6因子斜交モデル	2220.262	390	0.893	0.872	0.057	2370.262
6因子2次因子モデル	2424.507	399	0.881	0.862	0.060	2556.507

あった。なお、「定期的に参加している」群と「不定期に参加している」群に、有意な差はみられなかった。

IV 考察

本調査研究は、学生のボランティア活動への参加を促進する上での指針を得ることをねらいとして、彼らのボランティア活動への参加動機とボランティア参加の有無及び属性との関連性について明らかにすることを目的として行なった。まず本研究では、すでに米国において、ボランティア活動への参加動機を把握すべく開発されたVFIに着目した。VFIは、すでに西川²⁾や川元³⁾によって本邦に紹介されている尺度である。ただし、本邦のデータを使用して、VFIの信頼性ならびに妥当性を実証的に検討した研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究では本邦の大学生を対象として、VFIの妥当性については交差妥当性を、また信頼性に関しては次元性（内的整合性）を検討することを目的として行なった。交差妥当性に検討に関して、これまで提起されてきたVFIの4つの因子構造モデル（1因子モデル、2因子モデル、6因子斜交モデル、6因子2次因子モデル）を確認的因子分析により検討した。この分析方法は、複数の適合度指標によりモデルのデータへの適合度を評価できることを特徴としている¹²⁾。なお、ある対象集団で既に検証された妥当性を他の対象集団において再度確認する手続きは交差妥当化と呼ばれる¹⁵⁾。

その結果、いずれのモデルにおいても標準化されたパス係数に不適解は観察されなかった。しかしながら、1因子モデルと2因子モデルの適合度は統計学的な許容水準を満たすものではなかった。それに対して、6因子斜交モデルと6因子2次因子モデルのデータへの適合度は、概ね統計学的な許容水準を満たしていた。6因子2次因子モデルよりも6因子斜交モデルのほうがモデルの適合度がよいことが観察さ

れたが、その差はわずかなものであった。2次因子構造のモデルが下位概念（1次因子）ならびに観測変数を一次元的な概念の連続体とみなすことが可能であることを勘案すると、本研究においては「感情的安寧」「利他主義」「職業上での成功」「社会的つながり」「知識の習得」「自尊心の高揚」の6因子を1次因子、「ボランティア活動に対する総合的な動機」を2次因子とする6因子2次因子モデルをVFIの因子構造モデルとして採択した。これらの結果は、Okunらの知見⁹⁾と一致するものであり、米国のみならず、本邦のサンプルにおいても同様の因子構造が成立することが明らかとなった。したがって、ボランティア活動の参加動機に関して、VFIを使用することにより、今後、日米比較研究をも視野に入れた検討が可能になるものと考えられる。

次に、VFIの有用性を評価するため、ボランティア活動の参加状況別にVFIの総合得点ならびに下位尺度得点を一元配置分散分析と多重比較により検討した。この結果、ボランティア活動の経験がない群と比して、ボランティア活動の経験のある群のほうが、VFIの総合得点ならびに各下位尺度得点が高く、ボランティア活動に参加している学生はボランティア活動への参加動機が高いことが明らかになった。この結果は、VFIがボランティア活動の動機を測定する尺度としての妥当性があることを示唆するものであり、今後、ボランティアの教育などで活用できる可能性を示唆するものと考えられる。

ボランティア活動への動機（Motivation）は多次元的かつ複雑な概念であり、それに関する理論も様々に提唱されている。Winnfoldら¹⁵⁾は、これらボランティア活動の動機に関する諸理論を概観し、それらを利己志向（Egoism）と利他志向（Altruism）の観点から整理できることを明らかにしている。利己志向では、ボランティア活動への参加動機を主として自己実現、自尊感情や安心感を得る等の動機に求めるのに対して、他方、利他志向で

表3. ボランティア活動への参加状況別にみたVIF得点

領域	参加経験	n	平均	標準偏差	F値
総合得点	定期的	111	39.7	***	51.8
	不定期	734	36.7		
	経験なし	584	32.8		
感情的安寧	定期的	111	3.5	**	4.1
	不定期	734	3.1		
	経験なし	584	2.9		
利他主義	定期的	111	6.9	**	3.5
	不定期	734	7.0		
	経験なし	584	6.7		
職業上の成功	定期的	111	6.7	***	79.9
	不定期	734	5.5		
	経験なし	584	4.1		
社会的つながり	定期的	111	6.7	***	79.9
	不定期	734	5.5		
	経験なし	584	4.1		
知識の習得	定期的	111	9.1	***	17.5
	不定期	734	8.9		
	経験なし	584	8.5		
自尊心の高揚	定期的	111	6.9	**	4.7
	不定期	734	6.8		
	経験なし	584	6.4		

* p< .05
** p< .01
*** p< .001

は、ボランティア活動への参加が他者への援助や献身、社会的貢献等の動機に規定され则认为^{3, 15)}。事実、ボランティア活動参加者の多くが、このような動機を抱えていることが報告されてきた^{10, 17)}。ただし、ボランティア活動は、時代とともに様々な活動分野を含むようになり、ボランティア活動に参加することの意義も時代背景によって少しずつ変化しているものと推察される。したがって、従来の二元論的な観点にとどまらず、より多様な視点からボランティア活動への参加動機を捉え直す必要があるといえる。

本研究では、大学生のボランティア活動に関する動機を「感情的安寧」「利他主義」「職業上での成功」「社会的つながり」「知識の習得」「自尊心の高揚」の6領域で多次元的に把握した結果、本調査対象の大学生におけるボランティア活動に関する動機の特

徴として「知識の習得」「利他主義」、「自尊心の高揚」が高いことが明らかになった。この背景には、採用の際に学生時代のボランティア経験を問う企業がでてきたことなど、近年のわが国におけるボランティアに対する社会的な関心の高まりが学生のボランティア参加を促進する要因となっていることが考えられる。しかし、現在のボランティアへの関心の高まりは、その一方で、ボランティア活動の内容やあり方を問うところまで深まっているとはいえない状況もあることから、今後、ボランティアへの関心や参加動機をより内実のある活動に結び付けていくためには、情報の提供やボランティア活動に関する講習会などの支援を学生が選択できる形で提供することが求められている¹⁸⁾。このようなボランティア活動の推進をより具現化していく可能性のあるものとして、大学、短大におけるボランティアセンター

に期待が集まっている。ボランティアセンターは、学生のボランティアニーズの把握、調整をはじめ、教育の機会の提供、地域社会との連携などの機能を有しており¹⁸⁾、こうした働きかけが今後展開されることは強く望まれよう。

以上、本研究では、本邦において紹介にとどまっているVFIの因子構造モデルについて、欧米の先行研究で報告されている4つのモデルを措提し、確証的因子分析によりその適合度を検証した。その結果、わが国の大学生のサンプルにおいてもVFIは「感情的安寧 (protective)」「利他主義 (values)」「職業上での成功 (career)」「社会的つながり (social)」「知識の習得 (understanding)」「自尊心の高揚 (enhancement)」の6つの下位概念により構成される6因子2次因子モデルであることが確証され、VFIが欧米と日本という異なる社会文化を背景とする対象者にも通用する概念であるという交差妥当性が確認された。さらに、ボランティア活動経験がある学生ほどVFIの領域別ならびに総合得点が高いという関連性が認められたことにより、VFIによって把握された情報は、学生のボランティア活動への動機や意義を測定しており、ボランティア教育等の指標として今後活用できる可能性が示唆された。ただし、本研究は横断的調査研究であるため、ボランティア活動の参加経験がボランティア活動への参加動機を高めたのか、あるいは、もともとボランティア動機の高かった者がボランティア活動に参加していたのかについて、データからは判断することはできない。今後、縦断的研究デザインを用いて、ボランティア活動への参加前後でボランティア活動への参加動機にどのような差異がみられるか、すなわち個人の変容がどの程度期待できるか等の検討をすることが課題である。また、VFIを用いて、ボランティア活動への参加動機に関する促進あるいは阻害要因を解明していくことが望まれる。

文献

- 1) 経済企画庁 (2000) 国民生活白書. 大蔵省印刷局.
- 2) 西川正之 (2000) 援助とサポートの社会心理学. 21世紀の社会心理学4 第4章 ボランティア活動の動機と成果, 82-93, 北大路書房.
- 3) 川元克秀 (2001) ボランティア活動による活動者個人の変容. ボランティア白書2001, 158-172.
- 4) Jones, A., & Crandall, R. (1986) Validation of a Short Index of Self-Actualization. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12 (1), 63-73.
- 5) 林洋一、鈴木貢、榎本博明 (1991) 自己実現傾向測定尺度の研究. *母子研究*, 11, 69-76.
- 6) 川元克秀、佐藤陽、菊田英代子、松尾素、諏訪徹、土井進、中島修、高野利雄、柴田博. (1999). 福祉教育・ボランティア学習活動による学習者の即時的変容の内容とその意味. *日本福祉教育・ボランティア学習学会年報*, 4, 82-110.
- 7) Clary EG, Snyder M., & Ridge R. (1992) Volunteers' Motivations: A Functional Strategy for the Recruitment, Placement, and Retention of Volunteers. *Nonprofit Management & Leadership*, 2(4), 333-350.
- 8) Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. (1998) Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1516-1530.
- 9) Okun, M. A., Barr, A., & Herzog, A. R. (1998) Motivation to volunteer by older adults: A test of competing measurement models. *Psychology and Aging*, 13, 608-621.
- 10) Cnaan, R. A., & Goldberg-Glen, R. S. (1991) Measuring motivation to volunteer in human services. *Journal of Applied Behavioral Science*, 27, 3, 269-284.
- 11) Latting JK. (1990) Motivational differences between Black and White volunteers. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 19, 121-135.
- 12) 狩野裕 (1997) Amos, EQS, LISRELによるグラフィカル多変量解析一目で見る共分散構造分析一. 現代数学社.
- 13) 山本嘉一郎、小野寺孝義 (1999) : Amosによる共分散構造分析と解析事例、ナカニシヤ出版.
- 14) Arbuckle JL. (1997) Amos User's Guide

- Version 4.0. Chicago, Small Waters Corporation.
- 15) 古谷野亘、長田久雄。(1992) 実証研究の手引き—調査と実験の進め方・まとめ方。ワールドプランニング, 東京.
 - 16) Winniford, J. C., Carpenter, D. S., & Grider, C. (1997) Motivations of college student volunteers: A review. *NASPA Journal*, 34, 134-146.
 - 17) Oda, N. (1991) Motives of volunteer works: self-and other motives. *Tohoku Psychologica Folia*, 50, 55-61.
 - 18) 池田幸也 (2001) ボランティア活動の推進・支援にむけて—大学・短大ボランティアセンターの可能性を探る—, ボランティア白書 2001, 198-206.

Cross Validation of the Volunteer Function Inventory in Japanese College Students

Junko SAKANO¹, Yuki YAJIMA², Kazuo NAKAJIMA¹

1: Faculty of Health and Welfare, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi Okayama 719-1112, Japan

2: Graduate School of Medicine and Dentistry, Okayama University, 5-1-2, Shikata-cho, Okayama 700-8558, Japan

Key words: Volunteer, Motivation, Volunteer Function Inventory, Structural Equation Modeling

ABSTRACT The purpose of this study was to cross-validate the Volunteer Functional Inventory (VFI) in Japanese college students. Data finally derived from 1,429 students were used in statistical analyses. First, confirmatory factor analyses were conducted to evaluate four factor models of the VFI. Our CFA results illustrated that the second-order factor model consisted of six factors, "protective", "values", "career", "social", "understanding" and "enhancement", provided the better fit to the data. This result implies evidence for cross validity of the VFI. Furthermore, significant mean differences were found in VFI total and six dimension scores. These findings indicated that the VFI could provide useful implications for promoting volunteerism in college students.